

1. 報告要約

ネパールでは 10 年あまり紛争が続いているが、外部者が収集した情報をもとに死傷者数を伝えた報道はあるものの、当事者あるいは身近な者が記録をすることで、現実と向きあい、力を取り戻すような作業は行われてこなかった。歴史を振り返っても、政治史のみが記述され、民衆の生活が時代の流れにどのような影響を受けたのかはほとんど記述が残っていない。

このプロジェクトは、従来、記録作業と縁のなかったネパールの若者を主体に、多様な人々がそれぞれ紛争からどのような影響を受けたのか事実と向き合うことで、その多面性を理解し、地域の平和や和解に役立てることを目指した。参加者は日記、インタビュー、写真、絵といった手段で、紛争被害者と信頼関係を作り、情報を収集した。

活動期間中に参加した者は 82 名に及ぶが、記録集として仕上げる段階までできたのは次のサブ・プロジェクトである。

「ストリート・チルドレンが綴る、僕たちの暮らしと時代の変化」

「遠隔地の村から紛争を逃れてカトマンズにやってきた子どもたち」

「被害者から変革主体へ：人生を再建する農村の女性たち」

「農村で起きた紛争の真実と、平和への歩み：ダン郡の事例から」

メンバーが作業を通じて認識したのは、人権団体の統計や新聞記事で取り上げられる事件は紛争の一部に過ぎず、戦禍に遭った地域まで出かけて行かなくても、被害者は自分たちの身近にいるということだ。このプロジェクトは、参加者が被害者から話を聞ききっかけとなったが、同時に、インタビューをした相手が辛い体験を話すことでより傷を負ってしまうのではないかと、自分たちは話を記述するだけで良いのか、という葛藤にも苛まれることにもなった。この問いに対する答えが出せたわけではないが、被害者の体験を忘れず事実と向き合うことで、参加者と記録集の読者が具体的に紛争や平和について考えるきっかけをつくることはできたのではないかと思う。

2. 活動の目的

一般の人々が紛争や政治不安によって影響を受けている日常の記録を通じて、以下2点を目指した。

- 1) 外部者が情報収集することが目的ではなく、当事者本人あるいはその近くにいる者が記録作業を通じて過去の自分が置かれた状況と向き合い、力を取り戻すこと
- 2) ネパール各地の年齢、性別、民族・カーストの異なる人々が、それぞれ紛争からどのような影響を受けたのか事実を知って紛争の多面性を理解し、地域の平和や和解に役立てること

3. 活動の方法と内容

3-1. 方法

英語及びネパール語版趣意書を作成し、呼びかけに応じた協力団体および個人がサブ・プロジェクトを行う形で実施された。ワークショップへの参加などを通じて、日記をつけたり、写真を撮ったり、詩や絵をかく、といった活動全般に参加した者は以下の通り。

タプレジュン郡：1 団体 (ECDF) の 4 名。

カトマンズ郡： 3 団体 (JAFON、MKH、SSG) の 20 名と無所属 6 名。

ダン郡： 1 団体 (SEED) の 11 名。

ロールパ郡： 1 校の 21 名。

スルケット郡： 3 団体 (DCH、SSS、WHR) の 20 名。

バンケ郡： 1 団体

総計： 10 団体・学校、82 名

ジャーナリスト協力者：4 名

3-2. 内容

最終的に記録集をまとめる段階まで到達した各サブ・プロジェクトの詳細は以下の通り。(1) 協力団体、2) 代表者・参加者、3) 目的、4) 内容、5) 2006 年 9 月末現在の状況、⑥ ジャーナリスト協力者)

A. 「ストリート・チルドレンが綴る、僕たちの暮らしと時代の変化」

(Reasons and coping strategies of street children affected by conflict through eyes of their peers)

1) ジャガラン・フォーラム・ネパール(Jagaran Forum Nepal:JAFON): 元ストリート・チルドレンが運営する NGO

2) レワート・ラジ・ティミルシナ(Rewat Raj Timilsina): JAFON 代表兼事務局長、31 歳

3) ①ストリート・チルドレン自身が前向きに自信をもつようになること。

②ストリート・チルドレンが自分たちとその仲間の生活を記録することで、ストリート・チルドレンとなった背景や彼らの夢、暮らしの明るい側面など、外部者にとって見えにくいことを取り上げる。

③紛争や昨今のネパール全体の変化がストリート・チルドレンに与えた影響を身近な事例から調べる。

④外部から関わる者は、これからどのようにストリート・チルドレンを支えれば良いのか導き出す。

4) JAFON が運営する男子ストリート・チルドレンのための簡易宿泊施設 Hamro Sansar (僕たちの世界) には常時 30 名ほどの少年たちが寝泊りしている。自身もストリート・チルドレンだった代表者レワートをチーム・リーダーとし、少年たちは自分の仲間がストリート・チルドレンになった背景をインタビューし、彼らの日常生活をカメラで追った。

一般のメディアでは、彼らが乗り合い自動車の車掌として働く姿や、有価廃棄物を集める姿ばかりが取り上げられるが、このサブ・プロジェクトでは、休日を楽しむところや夜仲間と一緒に眠る様子など、被写体となった子どもと密接な関係がなければ撮影が難しい写真を撮った。

かつて、ストリート・チルドレンとなる少年たちは出身農村において未就学あるいは、公立学校を低学年で退学せざるを得なかったドロップ・アウト(中途退学者)がほとんどだったが、近年ネパール全体で就学率が上がった結果、未就学者は減り、4・5 年生まで通った子ども、中には英語を媒介とする私立学校出身者も含まれるようになった。ストリート・チルドレンとして一括される子どもたちも、時代とともに変化していることがわかる。

JAFON と関わりのあった少年のうち数名は、マオイストによる強制動員を逃れて村から都市にやってきた子どもたちである。彼らは親や、時に学校の教師の勧めで村を離れたという点が、親や教師と断絶して村を出てきたかつてのストリート・チルドレンとは明らかに異なっている。家族との絆を残したままの彼らは平和が訪れれば、村に帰りたいという希望を持っている。

中には実際にマオイストの少年兵として過ごした経験をもつ者もあり、彼らの振る舞いや態度は、安易に暴力に頼りがちなストリート・チルドレンの中でも仲間との諍いが絶えないといった特徴があるという。武力紛争が社会に暴力を蔓延させていることの証でもある。

それでもなお多数を占めるのは、貧困や家庭不和を背景とするストリート・チルドレンだ。私立学校に通っていたにも関わらず、病気がちな父親、生活に疲れた母親の元を離れて、路上で再生用プラスチックを回収しながら貯金をし、父の薬や妹の文房具を買うために働く者もいる。

彼らには家族を思う健気な面があるが、寒さや空腹を満たすためにタバコやシンナーを吸っている姿、執拗に物乞いをする姿だけが強調され、社会的に排除される原因となっている。差別された記憶は、大人になって路上での生活に区切りをつけ、定職につき、結婚して子どもをもった元ストリート・チルドレンにとっても深い傷となっている。路上で暮らしていた若者たちが、その後の人生をどう歩んでいるか、また現ストリート・チルドレンの少年たちの将来の夢についても記述している。

路上での生活は人生の通過点に過ぎないが、実際にはそれが彼らのアイデンティティ形成に影を落としている。この作業は、彼らが自らの過去と和解するきっかけになったのではないだろうか。

5) ネパール語版出版物の初稿が完成し、挿入写真を選考中。写真は別途、団体の財源獲得のためのカレンダー製作などにも使われる予定。

6) 写真撮影指導: ディペンドラ・バジュラチャルヤ(Deependra Bajracharya)、出版物編集: ユバ・ラジ・ギミレ(Yubaraj Ghimire)

B.「遠隔地の村から紛争を逃れてカトマンズにやってきた子どもたち」

(Present lives and future of the children escaped from their rural villages and families)

1) シャンティ・セワ・グリハ(Shanti Sewa Griha: SSG): ハンセン病患者や障害者らやその子どもが安らかに仕事、学業、生活を営むための施設を運営する NGO

2) シャンティ・タパ・マガル(Shanti Thapa Magar): SSG が運営する学校の元教員、21 歳

3) ①出身村を離れて暮らす子どもと話をし、作文や絵で気持ちを表現する作業を支え、励ます。

②遠隔地の村からカトマンズまで子どもたちがやってきた過程と現在の生活を記録する。

③紛争被害者の子どもとほかの子どもの違い、どのように現状を受け止めているのか観察する。

④彼らをどう支えるべきか考察する。

4) SSG の施設は当初ハンセン病患者や障害者やその子どもを対象とし、無償で医療・教育サービスを提供していたが、近年、紛争に巻き込まれて両親を失った子どもも受け入れるようになっていく。プロジェクトへの参加者シャンティは、殺戮が繰り返される農村から遠い首都カトマンズにもこうした子どもたちがいることに本人自身驚き、彼らが心のケアを必要としていることを伝えるために記録を始めた。

SSG 小学校の児童の中には、マオイスト支配地域下にあるネパール極西部・中西部出身者が少なくない。同校2年の9歳の少年 Jくんはフムラ郡の出身だ。村ではマオイストが強制動員をしたり、一般世帯からの収奪を繰り返していた。18歳の兄がマオイストに誘拐されて以来、母親は幼い Jくんも同じような目に遭うのではないかと恐れ、親戚の男性にカトマンズに連れていくように頼んだ。彼の郡には道路が通じておらず、何日も歩いた後ようやくバスに乗った。初めての長旅でカトマンズに来てからも、家族が恋しいのか黙っていることが多い。彼の父親もすでに亡くなっているのだが、彼が精神的にダメージを受けることを心配してまだ彼には知らされていない。「お母さんやお姉さん、お兄さんと離れて暮らすことにはだんだん慣れてきた。それは難しいことだけど、仕方がないから、我慢しなくちゃ。今は学校で新しい友だちもできたから、楽しいことや悲しいことを話せるのは嬉しい」と語る彼だが、「大きくなったら村に帰りたい。村に自分の家を作って家族と一緒に幸せに暮らしたい」と作文に書いている。

Jくんは紛争に巻き込まれた数千名に及ぶ子どもの一部に過ぎない。彼のように元の居住地から避難せざるを得なかった「国内避難民」のほか、親兄弟を失い孤児になった者、マオイストに少年・少女兵として強制動員された者、マオイストや王国軍兵士による性的虐待に遭った少女など、さまざまな形態がある。首都圏の一部を除く全土の学校が、マオイストがよびかけたゼネラルストライキによって閉鎖されたり、マオイストに寄付を強要された教員が学校を離任した結果、授業が行われなくなるといった影響も出ている。

10ヶ月近く紛争被害者の子どもと向き合ったシャンティは、「『今日の子どもは国家の将来を背負う宝物だ』というけれど、なぜ大切な子どもたちの人生が紛争によって壊されなければいけなかったのだろうか。彼はどうしてこんな目に遭わなければならないのだろうか。彼自身が過ちを犯したわけでもないのに」と結ぶ。

首都カトマンズは 2006 年 4 月の民主化運動を境に、まるで 10 年間の紛争のことを忘れたかのようになり、復活した 7 政党による与党とマオイストとの政治対話だけに注目が集まっている。

ネパールの紛争は、首都と農村の間に横たわる開発援助や機会の格差に反発する階級闘争だった。皮肉なことに、紛争が長期化するにつれ、首都への投資偏重は強化され、地方の「開発」は遅れ、その格差は一層広がっている。

紛争被害者の子どもは首都にも相当いると思われるが、本人や家族がマオイストの報復を恐れて避難民であることを公表しなかったり、受け入れ校や施設側に一人一人の生活背景を把握する仕組みがないことから、数は把握できていない。彼らは通常「数えられない」紛争被害者だ。取り上げた事例は、氷山の一角でしかないが、こうした子どもたちがカトマンズにもおり、彼らも紛争被害者に他ならないことを記録集の公開を通じて伝えたい。

5) ネパール語版出版物の初稿が完成し、挿入画や写真を選考中。写真については、子どもたちが紛争被害者であることから、掲載の是非について SSG の責任者と調整中。

6) 出版物編集: クリシュナ・サルバハリ(Krishna Sarbahari)

C.「被害者から変革主体へ：人生を再建する農村の女性たち」

(Struggles and transformation of rural women after receiving six months training by Nava Joti Training Centre(NJTC))

1)モヒラコハート(Mohila-ko-haat: MKH、「女性の手」:カトマンズ在住女性がバザー等で集めた資金をもとに農村女性に研修機会を提供する NGO

2)オルナ・チョウドリ(Aruna Chaudhary):MKH 会員、NJTC 第 1 期研修生

3)①現在研修中の女性たちと元研修生、特に紛争に巻き込まれた者を励ますこと。

②彼女たちの人生が研修の前後でどう変わったのか、その効果をインタビューを通じて明らかにする。

③研修後、その成果を地元で活用できた者とそうでない者を比較し、後者にはどのような障害・困難があったのか確認する。

④今後研修生を選考するプロセスはどうあるべきか、どのような基準が必要か、修了後どのようなバック・アップ・サポートをすべきか考察する。

4)モヒラコハートは、専従職員を置かず、カトマンズに住む女性たちのボランティア組織として出発した。当初は中古衣料や手作り菓子の販売で得た資金で、近隣に住む女性の起業支援をしていたが、2000年頃から、カトマンズ市内にも紛争を逃れてやってきた農村出身の女性、特に夫を失った女性が少なくないことに気づき、彼女たちの人生の再建に役立ちたいと考えるようになった。

メンバーの一人であるオルナは、タライ平野の農村出身で、かつてはモヒラコハートのメンバー宅で住み込みの家事使用人として働いていたが、1998年にカトリック教会系 NGO、ナバ・ジョティ研修所(NJTC)で6ヶ月間にわたる研修を受けたことがきっかけで、保健分野で活動する NGO に就職した。全寮制の研修所では、読み書き・計算といった基礎的な教育から、保健・衛生の知識、裁縫・編み物といった技術を身につけ、リーダーシップを育てるためのスピーチや、ドラマを演じる訓練を受けた。修了後、自分で問題を発見し、他の女性たちに助言をする存在になることを目指すこのコースには、少女人身売買のサバイバーとしてインドのムンバイから帰還した女性たちも参加し、トラウマをもつ女性たちが文字通り「再生」する研修として知られるようになった。そこで、モヒラコハートは、ナバ・ジョティ研修所に農村の女性たちを研修生として送ることを活動の柱とすることにした。

これまで20名ほどの女性の研修費を提供し、カトマンズで研修を受けている6ヶ月間に研修生の相談にのるなど側面支援はしていたが、モヒラコハート自体が専従職員を置かないために、遠隔地に住む元研修生との連絡は途絶えがちで、モヒラコハートは資金供与するだけの団体になっていた。ナバ・ジョティ研修所の研修コース1期性でもあるオルナは、この状況を残念に思い、研修所の同窓生を訪ねながら、元研修生の生活について記録することを企画した。

元研修生の名簿すらない状態から作業を始めたオルナは、モヒラコハートとナバ・ジョティ研修所の関係者から聞き取りを重ね、研修生の現住所を確認し、ネパール東部のジャパ郡、イラム郡、中部のマクワンプール郡、タナフン郡の女性たちの村に出かけた。

女性たちの中には、障害をもつ者、夫からの暴力の被害者、マオイストによって夫を殺された者、自身がマオイストによって誘拐された経験をもつ者などがいる。研修前は「被害者」として力なき存在だった彼女たちが、ありのままの自分を受け入れ、自信をもつためのさまざまな研修を受けた結果、自分自身の生活を再建させることはもとより、近隣の女性たちとグループ活動を始めるなど変革活動の主体へと変貌を遂げた事例も見られた。

一方、研修を受け、農村で孤軍奮闘しても努力が実を結ばなかった事例もある。これを元研修生個人の問題としてとらえるのか、モヒラコハートやナバ・ジョティ研修所など外部から関わる側の支援のあり方の問題として考えるのかという点で、現地を訪問したオルナ自身も解釈に悩んだ。どういう条件の人にとってこの研修が効果的なのか、研修生を支援する者はどんな点に注意すべきかについて、モヒラコハート内部で議論を重ね、教訓を導き出そうとしている。

5) ネパール語版出版物の初稿が完成し、レイアウト、校正作業中。

6) 出版物編集:クリシュナ・サルバハリ(Krishna Sarbahari)

D. 「農村で起きた紛争の真実と、平和への歩み: ダン郡の事例から」

(Reality of conflict and peace building process in Dang)

1) シード(Society for Environment Education Development: SEED): 青少年の教育分野で活動する NGO

2) シュリラム・チョウドリ(Shree Ram Chaudhary): SEED のプログラム・コーディネーター、31 歳

3) ① 紛争に巻き込まれ、親を失った青少年が自分の体験を書くことで、自信をもち癒されること。

② 紛争の実態と平和構築への歩みを地方で開発に関わる者の視点で記録する。

③ 開発に関わる者が、草の根の活動を通じてどのように和解に関わることができるのか考察する。

4) シードは、タライ平野の先住民タルーの青年たちを中心に結成された地域開発 NGO である。彼らが拠点とするダン郡は、マオイストの拠点である中西部丘陵地帯(サルヤン郡、ロルパ郡、ルクム郡)の南にあり、紛争の激化とともに、多数の国内避難民が流入するようになった。彼らが事務所を構えるトゥルシプール市内にも紛争の影響で村を追われた人々が暮らす集落がある。

同郡は、首都のあるカトマンズ郡の次に NGO が多い郡であるが、紛争が開発に与えた影響、あるいは今後開発が平和構築にどう貢献できるかという点についての記録や出版物を出している団体はない。これはダン郡だけに限った問題ではなく、ネパールのジャーナリズムや NGO がいずれも中央に集中しすぎており、時折地方の様子が報道される場合も、一時的に首都から出かけた者の記録だけが紹介されることが原因だ。

同団体の職員であるシュリラムは、1990 年代後半、別の NGO で活動した際に、自身と村人との交流や摩擦、村の変化を日記に綴り、足かけ5年に及ぶ観察の記録をまとめた経験がある。彼はその作業を通じて、社会の変化を考察するためには、同時進行で記録を残すことが重要であると実感した。そこで、シードの職員、識字学級の教師、研修を受けた青少年ボランティアらがチームを作り、中央のメディアではとりあげられなかった事件を記録する作業を始めた。

ダン郡は、インドと国境を接する平野から丘陵地まで広がる比較的面積の大きな郡で、平野の先住民タルーの他に、丘陵地のヒンドゥ教徒、非ヒンドゥ教徒など多様な人々が住んでいる。しかし、紛争に巻き込まれた人に注目してみると、ヒンドゥ教徒のダリット(不可触民)の割合が多い。マオイストによって殺された者もいるが、フルバリ村では、2002 年、12 名の成人ダリット男性が王国軍によって集団虐殺された。当時の政権は非を認めず、家族は遺体を確認することもできなかった。その後、地域の団体であるシードが国家人権委員会にこの事件の真相解明を求め、同委員会は 2005 年に各遺族に 5 万ルピー(日本円で 8 万円相当)の見舞金を出すことを文書で連絡した。しかし、2006 年 8 月現在、中央政府も、郡レベルの出先機関も支払っていない。遺された家族の多くは、土地やその他の生計手段を持たず、日雇い労働で現金収入を得ていた世帯主男性が亡くなってからは困窮を極めている。その影響は家族全体に及び、夫を失った後、精神的ショックから妻が立ち直ることができず、子どもを養育できなくなるほど深刻な事態に陥った家庭もある。

記録作業の一部には、この事件の遺族の少年・少女も加わり、彼ら・彼女らの父が殺されたのにも関わらず、当時その事実が無視され、未だに政府が責任を取ろうとしないのはなぜなのか、不正義への怒りを綴っている。

今後、草の根レベルでの和解が進むためには、起きた事実と向き合い、その現実立って、補償や和解を進めねばならないことから、シードは、この記録を和解への第一歩と位置づけ、作業に関わる人たち自身が尊厳を回復する過程と捉えている。

5) ネパール語版出版物に掲載予定の原稿が集まり、加筆・修正中。事例として取り上げられた者の写真や絵の収集も継続中。

6) 出版物編集: クリシュナ・サルバハリ(Krishna Sarbahari)

4. 活動の実施経過

2005年

- 8月 プロジェクト趣意書(英語・ネパール語・日本語)の作成と配布、協力者への呼びかけ、
- 9月 スルケット郡にて協力者呼びかけ、紛争被害児童の作文収集
- 10月 カトマンズ在住協力者打合せ
- 11月 カトマンズ在住協力者写真撮影および国内避難民の児童へのインタビュー開始
- 12月 協力者ロールパ郡訪問、マオイストモデル校生徒の絵画収集

2006年

- 1月 簡易ホームページ(英文)作成、ダン郡にて協力者呼びかけ
- 2月 ラリトプール郡ストリートチルドレンのグループ、インタビュー開始
- 3月 写真撮影ワークショップ
- 4月 収集原稿英訳
- 5月 編集作業に関わるジャーナリストへの説明
- 6月 各地のグループから進捗状況報告、カトマンズ近郊協力者共有ワークショップ 1
- 7月 カトマンズ近郊協力者共有ワークショップ2、スルケット郡、ダン郡にて共有ワークショップ
- 8月 各グループの収集原稿・写真をブックレットとしてジャーナリストが編集

5. 活動の成果:記録活動の一般化

ネパールの学校教育は暗記中心で、作文を書くなど個人の創造力を豊かにする機会が極めて限られている。また、児童・生徒を対象としたネパール語出版物がほとんど流通していないため、読書の習慣がない。ネパール語での新聞・雑誌は数多く発行されているが、問題を掘り下げて取材した調査記事は少ない。こうした環境にあって、一般の人々が記録活動に参加すること自体に意味があった。

プロジェクト参加者の大半は、これまで自分が記録する主体になる経験をしたことのない若者たちだったので、活動に参加するにあたって、まず自己紹介文を書き、日記をつけることを学んだ。しかし、段落の分け方、人称別の書き分け、直接・間接話法の区別、見出し・小見出しのつけ方など文章作法はもちろん、昨今の英語偏重教育のせいかネパール語の綴りが覚束ない者も少なくなく、彼らに作文指導をすることに相当のエネルギーを要した。今回の経験をもとに、今後多少でも日記や作文を書くことが習慣化すれば嬉しい。

6. 今後の課題

6-1. 情報の偏り

紛争の実態を把握するにあたって紛争を多面的に描くことは不可欠だが、今回は事例として取り上げた者の過半数がマオイスト側から被害を受けた者だった。王国軍や政府側から被害を受けた者も極力探す努力をしたが、国王が全権を掌握していた今年4月までの段階では、国家による人権侵害を公にすることは勇気のいることであり、我々の記録作業の対象とすることが難しかった。申請段階で目的としていた将来の「法廷」で使えるような資料収集に至らなかったのも同じ理由からである。

6-2. 継続して関わる協力者の必要性

計画段階で記録作業への協力候補として挙げていた団体の多くは、それらの団体の通常の活動である人権監視活動や民主化運動に全力を尽くしていたため、初期の時点でプロジェクトへの参加を得られなかったり、参加したものの成果物をまとめる段階まで継続した協力が得られなかった。

プロのジャーナリストに、記録作業や写真撮影の経験の少ない参加者への指導を期待していたが、彼ら自身が報道の自由を求めるロビー活動や、民主化運動への参加に忙しく、最初から最後まで継続して関る人を見つけることができなかった。その結果、記録作業をする参加者と、彼らの指導や編集に関わるジャーナリストの信頼関係の醸成に時間がかかった。

6-3. 記録の主体か、その内容か

本プロジェクトは、一般の人が記録することに意義を見い出そうとしたが、「教科書に書いてあることを写すのではなく、自分の考えを書くという作業をほとんどしたことがない人が主体となって記録に関わること自体、無理であり、また情報としての内容に乏しい記録にどれだけの意味があるのか」、換言すれば、「記録の主体と、その内容のどちらが重要か」という問いかけが度々関係者から出された。一般の人が記録の主体になるという点は最後まで貫けたが、内容を重視する場合は、必ずしも記録の主体には拘らないという選択肢も提示すべきだったかもしれない。

6-4. 収集資料の活用

成果物としてまとめているもの以外にも、自己紹介文、詩、作文、写真、ビデオ、絵、壁新聞などさまざまなものが集まったが、どこで、誰を対象にどう使っていくか、利用方法が明確でない。まずは、ネパール各地の子ども・青少年が平和教育の資料として生かせるように、CD化するなど、加工が必要である。

謝辞

紛争と政情不安によって事業の実現可能性が低いと見られがちなネパールでの、団体という基盤をもたない個人による申請事業を助成してくださった庭野平和財団、中古カメラの提供してくださった日本の個人寄付者のみなさま、困難かつ根気のいる作業と一緒に続けたネパールの若者たちと、ジャーナリストの協力者に心から感謝します。